

Title	スペイン黄金時代の社会と人びと：セルバンテスの小説から
Sub Title	Gentes en la sociedad española del Siglo de Oro : de la novelística de Cervantes
Author	瀧本, 佳容子(Takimoto, Kayoko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2002
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 No.17 (2002. 5) ,p.85- 131
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20020531-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

スペイン黄金時代の社会と人びと

—セルバンテスの小説から—

瀧本佳容子

1. はじめに

文豪ミゲール・デ・セルバンテス (Miguel de Cervantes Saavedra, 1547-1616年) が残したいくつかのジャンルにわたる作品のうち、長編『ドン・キホーテ』 (*Don Quijote*, 1605年および1615年)⁽¹⁾ と短編小説集『模範小説集』 (*Novelas Ejemplares*, 1613年)⁽²⁾ が、現代の読者にとっ

(1) 正式には1605年に出版された前篇が『才知あふるるラ・マンチャの郷士ドン・キホーテ』 (*El ingenioso hidalgo don Quijote de la Mancha*), 1615年に出版された後篇が『才知あふるるラ・マンチャの騎士ドン・キホーテ』 (*El ingenioso caballero don Quijote de la Mancha*)。本稿への引用は牛島信明訳『新訳ドン・キホーテ』前後篇, 岩波書店, 1999年, を用い, 引用箇所は本文中に章数とページ数をカッコ内に示した (引用部分のルビはすべて牛島による)。また, 筑摩書房刊の会田由訳 (初版は1965年), ならびに, 原典テキストとして, *Don Quijote de la Mancha*, Edic. del Instituto de Cervantes, Barcelona, 1998 (以下, *Don Quijote*, Edic. del Ito. de Cervantes と略記), および *El ingenioso hidalgo don Quijote de la Mancha*, Edic. de Martín de Riquer, Barcelona, 1999 (以下, *Don Quijote*, Edic. de Riquer と略記), を参照した。

(2) Cervantes, Miguel de, *Novelas ejemplares*, 3 tomos, Edic. de Juan Bautista Avallé-Arce, Madrid, 1992 (1ª. edic. de los tomos I y II en 1982, la del III en 1987), 一部は邦訳され, 牛島信明編訳『セルバンテス短篇集』岩波書店, 1988年, に所収。『ドン・キホーテ』の場合と同じく, 牛島訳からの引用は本文中にカッコ内でページ数を示した (引用部分のルビすべて牛島)。

て最も近づきやすいものだろう。この2作品は、内容、形式、表現などすべてにおいて、セルバンテス作品中でももっとも写実的だからである。本エッセイでは、この2作品を手がかりとして、いわゆるスペイン黄金時代⁽³⁾の社会を支配した通念や、それを代表する典型的人物を見ていきたい。

2. セルバンテスの生涯と作品

スペインはルネサンス期よりイタリアと並んで、牧人小説や騎士道小説などの物語文学を発達させ、ピカレスカ（または「ピカレスク」、「悪漢」と訳される）小説の誕生によって、スペイン語文学における写実主義に独自の形式と表現を与えた。セルバンテスは、『ドン・キホーテ』の中に、これらの先行する散文の形式を網羅的に取り込み、同時に、「的確で意義深い、そしてその場にしっかりとくる言葉を用いることによって、文章が平明で調べの高い、しかも軽妙なものとなるよう心がけ」（前編「序文」9頁）、後世で近代小説の嚆矢と評価されるこの作品を生み出した。

『ドン・キホーテ』前編の「序文」でセルバンテスは、「わたしの知能が生み出した息子ともいふべきこの書が、想像しうる限り、最も美しく、愉快で、気のきいたものであれかしと（…）念願している」（前編「序文」4頁）と記している。しかし、『ドン・キホーテ』が誕生したのには、セルバンテスの文才のみではなく、苦難に満ちたその生涯もあずかっ

(3) 厳密には、本稿で「スペイン」という呼称を使うことは適当ではないが、本稿のテーマから判断して、また、本稿が扱う時代をスペイン史学で *Monarquía Hispánica*, *la España de los Austrias* などと称するのが定着していることから、本稿では、「ハブスブルク朝スペイン」、「スペイン帝国」あるいは単に「スペイン」という語を使用する。なお、やはりすでに定着している「スペイン黄金時代」という語に関する代表的論考は、Bennassar, Bartolomé. *La España del Siglo de Oro*. Barcelona, 1990 (1ª. edic. de la traducción castellana en 1983), pp. 7-16.

ていた。『ドン・キホーテ』後篇の最終章でセルバンテスは、「ドン・キホーテはただただわたしのために生まれ、わたしはドン・キホーテのために生まれたのだ。彼が行動し、わたしがそれを記述することによりわたしたち二人だけが一心同体になれる」（後篇第74章609頁）⁽⁴⁾と述べているが、セルバンテス本人が行動した期間はスペイン帝国の絶頂を築いたフェリーペ2世（Felipe II, 在位1556-98年）の治世と重なり、かつスペインの盛衰と歩調を合わせるかのようなものだった⁽⁵⁾。

外科医の息子としてマドリード近郊のアルカラー・デ・エナーレス（Alcalá de Henares）に生まれ、父親の仕事の都合でカスティージャ（Castilla）地方各地を転々としたセルバンテスは、マドリードの人文学者フアン・ロペス・デ・オジョス（Juan López de Hoyos）神父の文法学校に学び、1568年、22歳の時にマドリードで出版されたある詩集に数編の詩を載せた。しかし、翌1569年に傷害罪を起こしてローマに出奔したあと、青年セルバンテスは文芸ではなく軍人の道を志す。1571年には史上名高いレパントの海戦に参加し、左腕に生涯癒えない傷を負いつつも勇敢な戦いぶりを示した。

しかしこれ以後、セルバンテスの生涯にふたたび陽があたるには、実に30年以上を経た1605年の『ドン・キホーテ』前編出版を待たなければならなかった。まず、スペインへの帰途で海賊に襲われアルジェで5年間の

(4) この科白は、作品中で真の著者と設定された架空のモーロ人シデ・ハメーテ・ベネンヘーリのもので書かれている。

(5) セルバンテスの生涯に関しては、Astrana Marín, Luis, *Vida ejemplar y heroica de Miguel de Cervantes*, 6 tomos, Madrid, 1948-56.をはじめ大著から論文まで枚挙にいとまがない。本稿では主に、Riquer, M. de, 'Introducción' a *Don Quijote*, Edic. de Riquer, pp. XVII-XXXI. および Caravaggio, Jean, 'Resumen cronológico de la vida de Cervantes', en *Don Quijote*, Edic. del Ito. de Cervantes, pp. CCXLIII-CCLXXI; Ibid., 'Vida y literatura: Cervantes en el *Quijote*', en *Don Quijote*, Edic. del Ito. de Cervantes, pp. XLI-LXVI. に頼った。

捕虜生活をおくった。1580年に何とか帰国したのち38歳で牧人小説『ラ・ガラテア』(*La Galatea*, 1585年)を出版し戯曲も発表するが、文筆で生計を立てることはかなわなかった。そのため40歳で無敵艦隊の食料調達官として南部のセビージャ(Sevilla)に移り、次いで国庫徴税吏となった。レパントの海戦で活躍した旧兵士にとっては惨めなこれらの職務は、さらに、無実の罪による投獄などの試練をセルバンテスに与えた。一方、肥大しすぎたスペイン帝国の疲弊を体現するかのような1588年のドーヴァー海峡における無敵艦隊の敗北を経て、世紀の変わり目とほぼ同時の1598年にフェリーペ2世が薨去し、戦争に明け暮れたスペインは東の間の休息に入った。新王フェリーペ3世(Felipe III, 在位1598-1621年)の治世が始まり、セルバンテスは遷都に合わせて1604年にバジャドリード(Valladolid)に居を移した。そして翌1605年に『ドン・キホーテ』前編がマドリッドで出版され、以後、死ぬ1616年までのおよそ10年間に『模範小説集』、『ドン・キホーテ』後篇をはじめとする代表作を発表した。齢65、『模範小説集』「読者への序文」において、セルバンテスが描いた自画像のごとく、完全な老人だった。

(…)額は平たくすがすがしい、快活そうな瞳(…)。あご髭は(…)20年もたたない前には金色であった。(…)歯は小さくもなく大きくもなく、と言うのもたったの6本しか残っていないからで、それも状態は悪くてがたついている。(…)背中はいくぶん曲がり気味で、足どりはあまり軽くない(…)⁽⁶⁾。

「多くの書を読み広く旅をする者は、実にさまざまなことを見たり知ったりできるものでござるよ」(後篇第25章212頁)というドン・キホーテの科白そのままに、セルバンテスは生涯にわたってスペイン内外を転々と

(6) Cervantes, 'Prólogo al lector', en *Novelas Ejemplares*, tomo I, p. 62.

した。その過程で『模範小説集』の『ガラスの学士』(*Novela del licenciado Vidriera*)の主人公と同様に、「あらゆるものを観察し、考え、記憶にとどめた」(183頁)ことであろう。そして、A. ドミンゲス・オルティースが述べるように、「『ドン・キホーテ』の中にその生涯すべてを注ぎ込んだ」⁽⁷⁾のであった。

セルバンテスは『ドン・キホーテ』において、シデ・ハメテ・ベネンヘーリ(Cide Hamete Benengeli)という架空のイスラム教徒が『ドン・キホーテ』の作者だという虚構の仕掛けを施した。そのシデ・ハメテについて、「きわめて几帳面」で「枝葉末節にわたること」も「決して黙過しようとはしなかった」(前編第16章135頁)としている。そして、「物語の記述に際して示した、細々としたことを、よしんばそれがいかに微細にわたることであろうと、(…)一つ一つ明るみに出さずにはおかないというその好奇心」(後篇第40章321頁)を称賛し、こうした「枝葉末節」が「著作の最も肝腎なところ」(前編第16章135頁)だと言い切っている。もちろんセルバンテスは、『ドン・キホーテ』を単なる娯楽作品として書いたのではない。上述した、自作に関するセルバンテスの言葉はすべて、イタリア・ルネサンス以来の伝統をふまえた言説である⁽⁸⁾。セルバンテスの執筆意図に答えるべく、以下の章では、若干の説明を加えながら、「美しく、愉快で、気のきいた」筆致で活写された激動期のスペイン社会とそこに生きた人びとを見ていこう。

(7) Domínguez Ortiz, Antonio, 'La España del *Quijote*', en *Don Quijote*, Edic. del Ito. de Cervantes, p. LXXXVII.

(8) 「書物に求められるところの最高の目的、つまり、(…)教示すると同時に喜ばせるという目的を実現するがごとき、完璧な美を誇る作品」(前編第47章522頁)という、より明快な言及もある。

3. 文と武に携わる人びと

『ドン・キホーテ』に登場する、さほど裕福ではない田舎暮らしの元軍人は、3人の息子に対して次のように言う。

「スペイン語に、わしの考えでは、いかにも真実と思われる諺がある。(…)《教会か海か王家がよい》⁽⁹⁾ というやつだ。その意味するところをよりはっきり言えば、権力と富を手にしたかったら教会の間人になるか、大洋を航海して交易をするか、あるいは王宮にあって国王陛下に仕えるかのいずれかに^上及くはないということである。こんな諺まで持ち出したのは(…)、お前たちの一人は学問を修め、もう一人は交易の道に進み、いま一人は王様に仕えてもらいたいからだが、王宮にポストを得るのはなかなか困難であってみれば、まずは兵士になってほしいというのがわしの願望なのだ。まあ、戦争に行ったらで大した儲けにはならないが、勇気を見せつけて大きな名誉を獲得する絶好の機会ではあるさ。」(前編第39章422頁)

当時編纂された諺集には、「人を出世させるものは3つある。教会と海と王家、または学問と海と王家である (Tres cosas hacen al hombre medrar: Iglesia, y mar, y Casa Real; o ciencia, y mar, y Casa Real.)」というものが採録されている⁽¹⁰⁾。つまり、聖職者か文官になるための「学

(9) 実際にあった諺で、もとは「人を出世させるものは3つある。教会、海、王家である。(Tres cosas hacen al hombre medrar: Iglesia y mar y casa real.)」(*Don Quijote*, Edic. del Ito. de Cervantes, p.451, n.8.)

(10) 17世紀前半(1630年以前)に編纂された諺集には、次の2つが採録されている。'Iglesia, o mar, o casa real, quien quiera medrar (「出世を望む者があれば、教会か海か王家である。)」', 'Tres cosas hacen al hombre medrar: Iglesia, y mar, y Casa Real; o ciencia, y mar, y Casa Real (「人を出世させる

間]、「交易」、宮廷人か軍人としての「仕官」が出世道だというわけだ。

このうち「交易」は、アルジェから帰国したセルバンテス自身も一度は試みた道だった。1590年にセルバンテスはインディアス（Indias, スペインおよびポルトガル領アメリカ）での仕官をフェリーペ2世に願い出るが、却下された。この挫折経験は、作品中の次の一節に反映されている。

(…)一文無しになった彼は、(…)この都市（セビージャ）の落伍者たちがよくとる手段に訴えることにした。すなわち、スペインで絶望した者たちの避難所であり、破産した者たちの逃げ込む教会であり、凶悪犯の隠れ家であり、その道の玄人からべてん師と名ざされた博徒たちの潜伏所であり、淫らな女たちを惹きよせるおとりであり、はたまた、多くの人の夢をかきたてるものの、ほんの少数者にしかそれをかなえてはくれない土地である、インディアスに渡ることにしたのである。（『やきもちやきのエストレマドゥーラ人』〈*Novela del celoso extremeño*〉6頁、カッコ内引用者）

しかしセルバンテスが特にこだわるのは、文芸と武芸（*las letras y las armas*）の2つである。前出の諺集に、「高貴に至るには文芸と武芸、高貴を保持するのは富（*Las Letras y las armas dan nobleza; consévala el valor y la riqueza.*）」というのが採録されており⁽¹¹⁾、「学問、海、仕官」が現実的選択だとすれば、「文芸と武芸」というルネサンス以来の理想は、この時代もはや本当の理念になってしまっていたと言える。このテーマにセルバンテスは何度も作品中で言及し、ドン・キホーテに2度に及ぶ

ものは3つある。教会と海と王家、または学問と海と王家である。』’（*Correas, Gonzalo, Vocabulario de refranes y frases proverbiales*, Edic. facsímil de la de 1926 (s. l.) por Víctor Infantes [Edic. princeps en 1906 por la R. A. E.], Madrid, 1992, pp. 249 y 489.)

(11) *Correas, op. cit.*, p. 266.

長広舌を繰り広げさせている（前編第38章および後篇第6章）。

「よいかな、人間が富貴に達するためにたどりうる道は二つあって、一つは文芸の道であり、いま一つは武芸の道である。」（後篇第6章 50頁）

この文武をめぐる議論を出発点として、以下では、当時のスペイン社会の上層部を形成していた身分と職業のいくつかを見ていきたい。

1) 軍人

まずは軍人である。レパントで武勇をあげたセルバンテス自身は、一見、文武のうち武の方に軍配をあげているように見える。

（…）私の体の傷は（…）どこで負った傷であるかを知っている者のあいだでは高く評価され、尊重されるものです。（…）かりに今、過去の事実を変えるという不可能を可能にしてやろうと言われたところで、あの驚嘆すべき戦闘に参加することなく健やかな体でいるより、やはりあの激戦のさなかに身を置きたいと思いますよ。（『ドン・キホーテ』後篇「読者への序文」3頁）

「（文人の精神と目的）は、武の使命に与えられるべき称賛には及びもつきませぬ。なにしろ武事のめざす目的というのは平和であり、これこそこの世で人が求めうる最大の恩恵なのですから。」（『ドン・キホーテ』前編第37章415頁、カッコ内引用者）

「なるほど、これまで文が武よりも大きな世襲財産を築いてきたことはたしかであろうが、それでも武にたずさわる者にはどこか文をつかさどる者より優れたところがあり、武人にそなわっている得もいわれ

ぬ光輝のようなものが、彼を他のすべての者の上に立たしめるのじゃ。」(『ドン・キホーテ』後篇第24章204頁)

一方セルバンテスは、軍隊生活の厳しさも繰り返し描いている。

(…) 兵士こそ貧しき者の最たる者 (…)。 (『ドン・キホーテ』前編第38章417頁)

(…) 歩哨に立つ時の身を切られるような寒さ、敵の攻撃を受ける危険、戦闘の恐ろしさ、包囲された時の飢えの苦しみ、敵陣爆破のために掘られた坑道での大災害、(…)。なるほど、そうしたことがらは軍隊生活の付随的な側面にすぎないと見なす向きもあるが、実を言えば、それこそが軍隊生活の本質であり、中核である。(『ガラスの学士』177頁)

(…) 兵站将校^{へいなん}の絶大な権力、一部の隊長たちの意地の悪さ、舎営担当官の苦勞、主計官にまかされる面倒な計算、宿营地となる町の住民の不平不満、兵士の宿泊証の売り買い、新兵の横着さ、宿舎の主人と兵士たちとのいざこざ、そして必要以上の荷役獣の請求といった、もろもろの現象 (…)。要するに彼 (主人公) は、軍隊というものが、彼自身が目にして辟易^{へきえき}した、これらすべてを必然的に包含していることを知ったのである。(『ガラスの学士』179-180頁、カッコ内引用者)

軍人が社会の支配者であり、名誉を体現する存在であることは、もちろん近代スペインに特有の現象ではない。とはいえ、レコンキスタを通じてイスラムと絶え間なく対峙し、カトリック両王 (los Reyes Católicos, 在位1474-1516年)以降は、カトリック圏の旗頭として、また領土の拡張と

防衛のために、さらに絶えざる戦いに身を賭してきたスペイン⁽¹²⁾の社会においては、軍人であること即ち名誉と見なす一般通念はますます強固になったことは想像に難くない。しかし実際のところ、カトリック両王からいわゆる「1640年の危機」に至るまでの1世紀半に、さして深刻な内乱を経験しなかった⁽¹³⁾スペインでは、国内における戦争の不在によって、危機感は弛緩し軍人志願者も減少するという逆説的な現象が起こっていた⁽¹⁴⁾。戦いはピレネーの、あるいは地中海や大西洋の彼方にあるものとなっていたのだ。『ドン・キホーテ』でドン・キホーテが繰り返す文武のいずれが優越かという議論ほど、現実には崇高でも単純でもなかった。これらの議論は、遍歴の騎士再現というドン・キホーテの夢の不可能性を補強するという説話論上の効果を発揮すると同時に、希薄化するばかりの過去の理想を消滅から守ろうとする、セルバンテス自身の反時代的で虚しい試みであるかのようだ。

『ドン・キホーテ』前編に登場するある貧しい百姓の息子は、少年のころ兵隊についていったまま10年以上帰郷せずにイタリアなどで兵隊生活を送る。そして安っぽく派手な格好で帰郷すると、「ひどく傲慢^{こうまん}になって、対等の立場の者や彼のことをよく知っている者たちを《お前》とか《貴様》呼ばわりするようになり、俺のこの腕が俺の父親で、俺の武勲が俺の家系だ、兵士としてならほかならぬ国王にだって何もひけめを負っちゃいない、とうそぶく(…)」(『ドン・キホーテ』前編第51章550頁)。こうした元兵士や、先に引用した「まあ、戦争に行ったところで大

(12) エラスムスは『痴愚神礼賛』(1511年)で次のように述べている。「イスパニア人は、武勇の誉れという点ではだれにもひけをとりません。」(渡辺一夫訳、中央公論社、1984年〔再版、初版1980年〕、119頁。)

(13) ヘルマニアの乱(1519年)とコムネーロの乱(1520-21年)を例外として挙げることはできようが、これら2つの事件は、支配者間の勢力争いというよりは、政治や社会の緊張を背景とした階級闘争であった。

(14) Domínguez Ortiz, A., *op. cit.*, pp. XCVII - XCVIII.

した儲けにはならないが、勇気を見せつけて大きな名誉を獲得する絶好の機会ではあるさ」などという科白は、ドン・キホーテ、そしておそらくセルバンテス自身にとって冒瀆的である。しかし、セルバンテスがこの科白をわざわざ元軍人に語らせたのは、理想と現実の乖離に長く苦しんだ末に作家として開花したセルバンテスならでは、幻滅の末にたどり着いた透徹した達観のなせる業だったに違いない。

2) 郷士

「郷士 (hidalgo)」は、他のヨーロッパ諸国にはないスペイン独特の最下級の貴族の位である。ドン・キホーテもこの郷士である。

「わしが由緒ある旧家の出で、相当の田畑もあれば財産もある、そして侮辱に対する補償として五百スエルドを申し受ける権利を有する、れっきとした郷士であるのは事実 (…)」(『ドン・キホーテ』前編第21章196頁)

郷士はもともと世襲による位だったが、レコンキスタの過程では、戦いへの貢献に対する報奨として多くの平民に与えられ、また王権から金で買える場合もあったため、近代に入るとその数は地方都市を中心に非常に増加していた。郷士のうち所領を持つのは少数派で、カトリック両王期からは特に、再編や新設された国家行政機構に多く登用され王権の意向にきわめて忠実な行政官僚集団を形成した⁽¹⁵⁾。こうした多数の、いわば新興郷士の存在が背景にあって、ドン・キホーテは自分が「旧家の出」であることにこだわり、また、次のようなマキアヴェッリばりの論を展開する。

(15) Domínguez Ortiz, Antonio, *La sociedad española en el siglo XVII*, tomo I, Granada, 1992, Edic. facsímil de la 1ª. de Madrid, 1963, pp. 162-188; Fernández Álvarez, Manuel, *La sociedad española en el Siglo de Oro*, Madrid, 1989 (2ª. edic. revisada y aumentada), tomo I, pp. 149-151; Salazar Rincón, Javier,

「(…) この世に存在するすべての家系は、次に述べるような四種類のいずれかに帰することができる (…)。まず、当初は卑賤であったのに徐々に発展して力を拡大し、ついには権勢を極めるに至った家系。第二の種類は、そもその始まりからの名家で、その名望を保持しつづけ、今でも当初と変らぬ格式と威厳を保っている家系。第三は、(…)。そして最後は、これが圧倒的多数を占める庶民のそれであるが、(…) 世に住む人間の数をふやすこと以外、たいした^{とりえ}取得もない(…)。」(『ドン・キホーテ』後篇第6章49-50頁)

しかし、旧家にせよ新興にせよ、もとは「戦う人」だったはずの郷土も他の上級貴族も、セルバンテスの時代にはもはや戦う場を失っている。「狂気の中に素晴らしい正気の交錯する変った狂人」(『ドン・キホーテ』後篇第18章141頁)であるドン・キホーテは、この現実を正確に把握していたようだ。

「宮仕えの騎士ならば、貴婦人に奉仕し、制服を身に着けて国王陛下の宮廷に光輝を添え、おのが食卓の豪勢な食事で貧しい騎士をもてなし、馬上槍試合を催し、模擬戦に参加し、このような営為を介して、みずからが高貴で、寛大で、立派な、そして、とりわけ善良なキリスト教徒であることを示されるがよい。」(後篇第17章135頁)

宮仕えの必要もなく、下のように悠々自適の郷土もいる。

El mundo social del "Quijote", Madrid, 1986, pp. 86-88; *Don Quijote*, Edic. del Ito. de Cervantes, p. 232, n. 72; R. A. ストラドリング, M. ヴィンセント著, 小林一宏監修, 瀧本佳容子訳『図説世界文化地理大百科 スペイン・ポルトガル』朝倉書店, 1999年, 69頁。

「わたしは (…) 少なからずゆとりのある暮らしをし、妻と子供、それに友人たちにかこまれて日々を送っております。私の主たる仕事は狩猟と魚釣りです (…)。書物は、スペイン語のものと同ラテン語のものを合わせて七、八十冊所有しておりますが、それらは歴史、あるいは信仰に関するもの (…)。」(『ドン・キホーテ』後篇第16章120頁)

それにひきかえ、ドン・キホーテの家計はたいへん慎ましい。家政婦と下男を雇ってはいるが、当時は安価だった牛肉の煮込み、夜の常食は挽き肉の玉ねぎあえといった内容の食費で実入りの4分の3は消えてしまい、100冊以上にのぼる騎士道小説の蔵書をそろえるために畑地を相当売り払ったり(前編第1章18頁)、冒険の旅に出る支度を調えるために「あれもこれも売ったり質に入れたりして、何から何まで二束三文で手放して」(前編第7章64頁)資金をこしらえなければならない。容赦ない見方をすれば、「(…) 田舎の郷士の分際 (…) わずかばかりのぶどうの株と小さな畑しか持っていないくせに、またみじめたらしい服を身につけているくせに (…)」(後篇第2章23頁)というしがなさだった。

貴族か平民かという旧来の階級の内部で、今や富という新しい基準がさらなる階級差を生み出している⁽¹⁶⁾。2匹の犬を主人公とし社会に対する辛辣な批評に満ちた一種のピカレスカ小説『犬の対話』(*Coloquio de los perros*)には、黒人奴隷を供につけ、椅子に座らせたままで息子たちをイエズス会の学校に通わせるセビージャの富裕な商人のエピソードが登場する。そしてセルバンテスは、「セビージャのみならず他の都市でも、商人の間では自分自身ではなく子供たちに威厳と富を持たせることによって、己の力を誇示することが流行なのだ。なぜかと言えば、商人というものは、それ自身よりもその影響力によって、より大したものだとわかるもの

(16) Salazar Rincón. *op. cit.*, p. 89.

だからね」⁽¹⁷⁾と鋭い観察眼を働かせている。セルバンテスは以上のような状況を、主人公の家計のエンゲル係数が75%などという、およそ名作にふさわしくない記述で『ドン・キホーテ』冒頭を飾ることで示唆し、読者の意識の中に刷り込もうとしたのかもしれない。そして作品中には、豊かな郷土と貧しい郷土、豊かな農民などを登場させ、「農園(…)、オリーブ油やぶどう酒の压榨場、数多くの大小の家畜や蜜蜂の巣箱」(前編第28章290頁)を所有するなどといった、物語展開にはまったく必要のない詳細を並べていく。さらに注目に値するのは、次のサンチョ・パンサの科白である。

「でも、恩恵をさずかる時がいつまでたっても来ねえで、ついに給金だけに頼らざるをえなくなる時のために、ぜひお尋ねしときますが、さっき言いなされたような昔の遍歴の騎士の従士というのは、いくらぐらい稼いでいたんでしょうかね。で、給金はやっぱり月極めだったんですか、それともレンガ職人みたいに日割りだったとか。」(前編第20章186頁、ほかに後篇第7章54-55頁)

「おいらが、(…)トメ・カラスコのところで働いていたときには」と、サンチョが答えた、「賄い付きで月に二ドゥカードもらってました。お前様に対する奉公でいくらもらったらいいかは、ちょっと分からねえ。」(後篇第28章237頁)

これらは、中世的な「奉公」や「恩恵」の概念はもはや消滅し、富がこれに取って代わったこと、さらに富を計る指標として、貨幣経済というきわめて具体性を持ったものが浸透していた様を物語っている。ここでサン

(17) Cervantes, *Coloquio de los perros, en Novelas ejemplares*, tomo III, pp. 261-262.

チョ・パンサが古の騎士道を容易に理解できないのは、彼が百姓であるためだけではない。

3) 学生および文官

セルバンテスの時代には、貴族の称号がなくとも立身出世はかなう。もと浮浪児である『ガラスの学士』の主人公は、こんな科白を吐く。

「学間をして有名になるんです」と、少年が答えた。「だって、普通の人間でも司教様になれるって言うじゃありませんか。」(『ガラスの学士』175頁、引用者により一部改訳⁽¹⁸⁾)

多く見積もっても識字率が15-20%⁽¹⁹⁾という当時であって、立身出世に役立つほどの教育、ましてや大学教育を受けることは、もちろんごく一部の人間に許されることだった。『犬の対話』には、アルカラ・デ・エナーレス大学 (Universidad de Alcalá de Henares, 1508年創立) に5000

(18) 牛島訳では最初の部分が「学間をして、学者として有名になるんです」となっているが、原文 ('Con mis estudios-respondió el muchacho, siendo famoso por ellos ; ...': Cervantes, *Novela del licenciado Vidriera, en Novelas ejemplares*, tomo II, p. 104.) に則して改めた。牛島訳は誤訳とは言えないが、原文に則すると必ずしも「学者として」ではない。また、このセクションで述べるように、学間をする者(特に世俗法)の現実的出世の道は、学者ではなく文官、書記、弁護士だった。実際、『ガラスの学士』の主人公もサラマンカ大学で法学を学んだ後、弁護士開業を試みる。

(19) Fernández Álvarez, *op. cit.*, p. 172. 当時の識字率に関する近年の研究では、社会階級はもちろん、地域、性別、宗教、識字の程度(署名ができるだけかそれ以上か)などを考慮に入れた詳細な実証分析が進んでいる。その成果の一つとして、Viñao Frago, Antonio, 'Alfabetización y primeras letras (siglos XVI-XVII)', en *Escribir y leer en el siglo de Cervantes*, compuesto por Antonio Castillo, Barcelona, 1999, pp. 85-109. を参照されたい。

人の在学生在がいるという言及があるが⁽²⁰⁾、現存するスペイン最古の大学サラマンカ（Universidad de Salamanca, 13世紀前半創立）の在學生は、16世紀後半から17世紀第一四半世紀にかけては年間5000～7000人の間を推移した⁽²¹⁾。M. フェルナンデス・アルバレスの計算では、16世紀末のスペイン（カスティージャ王国およびアラゴン連合王国）の人口は約667万人である⁽²²⁾。これをもとに単純計算すると、サラマンカとアルカラ一両大学の在學生が全人口に占める割合は0.15%という低さで、ここに外国人學生が含まれていることを考慮に入れるとさらに低くなる。

中世の創立以来、自治の伝統を有する大学に身を置く學生は、文学者たちの好んで取り上げる材料のひとつとなった。その発足以来、知に携わる者たちの共同体だった大学で学ぶ者は、一歩間違えれば墮落しかねないほどの自由を享受し独特の文化を育んだ。貴族をはじめとする富裕層の學生の中には、ごく少数だが実家にいる時と変らない生活を送っている者もいた。後にフェリーペ4世（Felipe IV, 在位1621-65年）の宰相として国政を牛耳ることになるオリバーレス伯公（conde-duque de Olivares）ガスパール・デ・グスマン（Gaspar de Guzmán, 1587-1645年）は、1601年に14歳でサラマンカ大学に入るが、一軒家を借り上げ、執事のほか20人の使用人と家庭教師に囲まれて暮らした⁽²³⁾。また、富豪とまではいかなくとも、地方都市や農村地帯の行政官などの子息たちは、ゆとりのある暮らしを送った。1568年にサラマンカ大学法学部に入った地方地主の息

⁽²⁰⁾ Cervantes, *Coloquio de los perros*, Edic. citada, p.243.

⁽²¹⁾ Rodríguez-San Pedro Bezares, Luis E., 'Vida estudiantil en los Siglos de Oro', en *Estudiantes de Salamanca*, Salamanca, 2001, p. 35.

⁽²²⁾ Fernández Álvarez, *op. cit.*, pp. 59-64. 1591年にカスティージャ王国で実施された人口調査などにに基づく数字。なお、この人口調査後の10-20年間にスペインは、ペスト流行（1596-1602年）、モリスコ追放（1609年）などで人口が減少する。

⁽²³⁾ Rodríguez-San Pedro Bezares, *op. cit.*, pp. 21-22.

子ガスパール・ラモス・オルティース (Gaspar Ramos Ortiz, 1546-1631年) のように、継母との不仲、亡母の遺産相続問題という家庭の事情から逃れるために大学に来たという、ある意味で非常に恵まれた境遇の者もいた。彼はサラマンカ滞在中まめに記した日記の冒頭に下のように書きつけた。

はっきりさせておきたいのは、私はいつも父に対し、自分は学問などしたくない、もし学問をするならば、それは他にやりたいことがないし、家にもいたくないのが理由であると、願いを述べていたことである。そして、飢え死にしないために私は学問の道に入ったのだ⁽²⁴⁾。

とはいえ、文学者たちの注目を惹いたのは、学生たちの貧しさの方だった。まずは、文武にまつわるドン・キホーテの議論から引用してみよう。

「それでは、文事にたずさわる学徒のこうむる辛苦から考えてみまするが、何よりもまずあげるべきは貧困でありましょう。とはいえ、すべての学徒が貧乏というわけではなく、全体の状況を端的に言いあらわしたまでのことでござる。まあ、彼らが貧困にあえいでいるとさえいえば、そのうえ彼らの不幸を強調する必要はありますまい。」(前編第37章 416頁)

セルバンテスは、『犬の対話』でも「シラミと飢えは大学生活にはつきもの、しかし美徳と好奇心に満ちたあの大学生活ほど快く楽しいものは他

⁽²⁴⁾ *Diario de Gaspar Ramos Ortiz*, transcrito en Rodríguez-San Pedro Bezares, Luis E., *Vida, aspiraciones y fracasos de un estudiante de Salamanca. El diario de Gaspar Ramos Ortiz* (1568-1569), Salamanca, 1999 (2ª. edic., 1ª. edic. en 1987), p. 33.

にあるまい」⁽²⁵⁾と述べるなど、他の黄金時代の作家と同じく、大学生に関するエピソードを多く取り入れている。

そして、金持ちにせよ貧者にせよ、世俗の人間にとってもっとも有用な学問は法学（世俗法）だった。先のセクションで触れた、『ドン・キホーテ』に登場する田舎で悠々自適暮らしの郷土は、息子に法学を学ばせたいと考えていたのに息子は詩学にのめりこんだと嘆く（後篇第16章121頁）。そして、「学問をして有名になる」と宣言した『ガラスの学士』の主人公は、金持ちの大学生に仕えながら、苦勞の末に法学の学位を得る。

「わたしはサラマンカ大学の法科を出た者であります、家が裕福でなかったものですから苦學の末、二番の成績で学位を得たのであります。この事実からも、わたしの持っている学位が決して依怙^{えこひいき}聳^{こびき}肩^いによるものではなく、わたしの実力が勝ちとったものであることがお分かりいただけます。」（229頁）⁽²⁶⁾

サラマンカ大学創立と同時代に編纂されたカスティージャ王国の『七部法典』（*Las Siete Partidas*）第7部第31条は、ヨーロッパで初めての大学に関する法規だが、その第8項は「教授たち、特に法学の教授たちが持つ名誉について」と題されている。そして、「法学は正義の礎であり、他のどの学問よりも世に利する」と述べ、法学教授に人頭税免除の特権を与えている⁽²⁷⁾。神学が「あらゆる学問の王」（『ドン・キホーテ』後篇第16章121頁）であった時代において、法学重視をここまで明確に打ち出した背

⁽²⁵⁾ Cervantes, *Coloquio de los perros*, Edic. citada, p. 265.

⁽²⁶⁾ 『ドン・キホーテ』後篇第18章139-140頁にも同様の言及がある。*Don Quijote*, Edic. del Ito. de Cervantes, p. 774, n. 19,も参照されたい。

⁽²⁷⁾ Alfonso X el Sabio, *Las Siete Partidas*, cotejadas con varios códices antiguos por la Real Academia de la Historia, tomo III, Madrid, 1807, p. 344.

景には、官僚の需要の高さがあったからだ。とはいえ、1599年にサラマンカ大学に登録した学生の学部別内訳は、教会法60%、神学15%、哲学11.5%、世俗法5.3%、医学3.5%と、世俗法を修める者の割合は低かった。ただし、教会法にせよ世俗法にせよ法学を修めた者にとって最良の進路は、教会あるいは国家の文官となることだった⁽²⁸⁾。『ガラスの学士』の主人公のように卑賤な出自の貧者でも、運と知力に恵まれ、ひたすら忍耐を積んで学位を取れば、その後には安定した未来が待っていたのである。ドン・キホーテは、先に引用した大学生の窮乏ぶりを述べた科白で、次のように付け加える。

「文事にかかわる学徒は、いま申したような険しくも苦難に満ちた道を、ここでつまずき、あそこで転び、起きあがったかと思うとまた倒れながらも歩き続け、ついに望みの地位にまでたどり着く。そうして、いったん高い地位に就いてしまうと、(…)まるで幸運の翼に運ばれてきたかのようなになる。(…)肘掛け椅子に座ったまま世界を治め、天下に号令する彼らは、かつての飢えを飽食に、打ち震えた寒さを心地よい涼しさに、すり切れた衣服を盛装に、身を包んで寝たむしろを上等のリンネルと緞子とんすに変えてしまうのでござる (…)」(前編第37章416頁)

「(…)文人あるいは文官にあっては、(…)官途についておるというだけで、その給料により、まあ、役得による収入のことは言わぬが、まともに暮らしていけるのでござる。」(前編第38章418頁)

そして『ガラスの学士』の主人公は、世の中のありとあらゆる人種と職業を辛辣にこきおろす中で、書記 (escribano) については一層磨きのか

⁽²⁸⁾ Rodríguez-San Pedro Bezares, 'Vida estudiantil en los Siglos de Oro', p. 36.

かった皮肉を吐く。

「書記は公人であって、彼なくしては、判事もその職務を十全に果すことはできません。そして、そうした要職であってみれば、書記はどこまでも自由な人間でなければならず、奴隷でも、奴隷の子孫であってもならないし、れっきとした嫡出子のみには許される仕事であってみれば、私生児や怪しげな血筋の者にはとても務まらないのです。(…) 何ととっても、彼らこそ秩序ある国家にとって最も必要な人びとなのです。」(222 頁)

1611 年に出版された S. コバルービラス (Sebastián de Covarrubias, 1539-1613 年) の『スペイン語宝典』(*Tesoro de la lengua castellana o española*) によれば、「書記 (escrivano)」にはさまざまな種類があり、「まず、文盲の平民にかわって計算や書類作成を行う者を指す。さらに、筆を使って身を立っているもの、すなわち前述の者に加え、文書の筆写をする者や行政機関の書記も指す」⁽²⁹⁾。この中で特に国の行政官が、社会的影響力を背景に幅をきかせたのは想像に難くない。中でも、サラマンカ、アルカラー・デ・エナーレス、バジャドリッドといった有名大学の博士号を持つ平民出身の行政官には、一代限りという制限つきながらも貴族の称号が与えられることがあった⁽³⁰⁾。当時の諺集には、「書記と売春婦と床屋が道を行き、小道に入っていく。(彼ら全員がそれぞれのやり方で金を巻き上げるという意味)」とか、「書記、警吏 (alguacil)、議員 (procurador, 議会に都市を代表して出席した)、みんな泥棒」といったものが採録

⁽²⁹⁾ Covarrubias, Sebastián de, *Tesoro de la lengua castellana o española*, Barcelona, 1989 (2ª. edic., 1ª. edic. en 1987), reimpresión de la de 1943 preparada por M. de Riquer, p. 540.

⁽³⁰⁾ Bennassar, *op. cit.*, p. 47.

されている⁽³¹⁾。

平民も行政官に登用することは、カトリック両王が行政機構の再編・強化の中で特に明確に打ち出した方針のひとつだった。両王は行政官の条件として、「10年間の大学教育、司法・行政の高官を希望する者の年齢は25歳か26歳まで」と法的規定も行った⁽³²⁾。D.ウルタード・デ・メンドーサ (Diego Hurtado de Mendoza, 1500/03/05-75) の『グラナダ戦役』 (*Guerra de Granada*, 出版は1627年) の記述は、文官の社会的地位を明快に述べていて興味深い。

カトリック両王は、上流階級と下層階級の間に齟齬を来たすことなく、その中間の存在である学士に、司法と公的職務の遂行を任せられた。(…) こうした行政組織は当時あまり見られなかったが、全キリスト教世界に広がった。そして今日では、その権力と権威はきわまっている (…)⁽³³⁾。

そして、自ら戦いの前線に立ち執務のために席を暖めることが少なかったカルロス1世 (Carlos I, 在位1516-1556年) の時代になると、取り扱った文書の量が飛躍的に増大した。このシステムをさらに完成させたのが、フェリーペ2世である。フェリーペ2世は、父親とは対照的に自ら執務に取り組んだ君主だったが、イベリア半島内外に広がるスペイン帝国の行政を掌握するために、文書を使った意志伝達を徹底させ、同時に、有能な人材を活用するために行政官登用システムを改善した。王室代理官 (co-regidor, 王室任命による地方行政長官)、聴訴官 (oidor, 聴訴院 <audi-

(31) Correas, *op. cit.*, p. 206.

(32) Bennassar, *op. cit.*, p. 43.

(33) Hurtado de Mendoza, Diego, *Guerra de Granada*, Cádiz, 1990, Edición facsimilar de la de Barcelona de 1842, 'Libro I', p. 8 (傍点引用者); Bennassar, *op. cit.*, p. 41.

encia) の官吏) など高位の職に関しては辞職や売買を禁じ、数年ごとに人員の配置転換を行った。また、カスティージャの王国諮問院 (Consejo Real, 当時の国政決定機関で「王室会議」と訳されることもある) に入るには、カトリック両王が定めた10年間の大学教育のほかにも試験を課した⁽³⁴⁾。行政機構が複雑になり、文書による決定を徹底させた結果、決定までに従来より時間がかかるようになったが、フェリーペ2世にとっては、自らの意志をその領土のすみずみにまで浸透させるための有効なシステムだった。帝国の中心に常に鎮座する王の代役を文書がつとめたのである⁽³⁵⁾。しかしこのシステムは、執務に意欲を示さなかったフェリーペ3世および4世の時代には、国政を牛耳る寵臣の台頭を許すことになる。

4. 越境する人びと

前章では、時代の推移に伴って生じる価値感の変化に影響を被りつつも、社会の上層部に位置する身分と職業を見てきた。本章では、こうした公的身分や階級の将外に置かれた人々を見ていこう。彼らはまた、時には、階級や国境など様々な意味での境界を越える存在でもあった。

1) ピカロ

ピカレスカ小説はスペインが生んだ小説ジャンルだが、これの嚆矢は作者不詳の『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯、およびその幸運と不運』 (*La vida del Lazarillo de Tormes y de sus fortunas y adversidades*,

⁽³⁴⁾ Bennassar, *op. cit.*, pp. 46-47.

⁽³⁵⁾ Bouza Álvarez, Fernando J., 'Escritura, propaganda y despacho de gobierno', en *Escribir y leer en el siglo de Cervantes*, pp. 95-103. なお同論文は、16世紀後半に行政文書のみならず「書かれた物」全般についての観念が、「記録として事実を後世に伝える役割を担う」というものに変化していく過程を扱ったもので、きわめて興味深い。

1552, 1553 o 1554)⁽³⁶⁾, そして, 1599 年出版のマテオ・アレマン (Mateo Alemán, 1547-1615) 作『グスマン・デ・アルファラーチェ』(*Guzmán de Alfarache*)⁽³⁷⁾ は一世を風靡した。セルバンテスがピカレスカ小説の代名詞ともいえるこの 2 冊を読んでいたことは間違いない。

「これが出版された暁には、『サラリーリョ・デ・トルメス』をはじめ、それに類する物語ですでに書かれたもの、あるいはこれから書かれるものすべての影が薄くなってしまうこと請け合いだね。」(『ドン・キホーテ』前編第 22 章 206 頁)

彼は (…) かの名高い悪党アルファラーチェにさえ講義することができるほど、やくざな放浪生活の万般に通じるようになったのである。」『麗しき皿洗い娘』〈*Novela de la ilustre fregona*〉 234-235 頁)

セルバンテスは、16 世紀以降スペイン社会の特有現象だったピカロ (pícaro, 「悪漢」と訳される) を実際に目にしただろうし、自分の作品中でもピカレスカ小説を試みている。下の『ガラスの学士』の冒頭などは、「生まれたのがトルメス河のまん中だった」⁽³⁸⁾ ピカロを主人公とする『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』へのオマージュにほかならない。

ある時、トルメス川のほとりを散歩していた二人の学生が、とある

(36) 初版は 1552 年か 1553 年に出版されたと見られるが現存しない。現存する最古の版は 1554 年、ブルゴス、アントウェルペン、アルカラー・デ・エナーレス刊のもの。

(37) Alemán, Mateo, *Primera parte de Guzmán de Alfarache*, Madrid, 1599. 続篇は, *Segunda parte de la vida de Guzmán de Alfarache, atalaya de la vida humana*, Lisboa, 1604.

(38) 会田由訳『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』岩波書店, 1981 年 (第 11 刷, 初版 1941 年, 第 5 刷改訳発行 1972 年), 6 頁。

木の下に、年のころなら十一歳くらいで、百姓のような身なりをした少年の眠っているのに気づいた。(174頁)

「刺す」という動詞 *picar* から派生した「ピカロ」は、1611年の『スペイン語法典』には掲載されていないが、下の一節のようにすでに巷間では定着していたらしい。

そのあとから大勢の若者が、より詳しく言えば、調理場で働くあらくれたちや下働きの連中が追いかけてきた。(『ドン・キホーテ』後篇第32章 275頁)

『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』の主人公は、前科者の父を失い、寡婦の母親から「これからはせいぜい自分の力でやっていくんだよ」⁽³⁹⁾ と言い含められ、いかがわしい祈祷や民間医療で日銭を稼ぐ盲人に手引きとして仕えながら流浪の生活に入る。単なる孤児や浮浪児と違っているのは、ピカロが「おれは一人ぼっちなんだからな、だから自分でどうやっていったらよいかも考えることだ」⁽⁴⁰⁾ という醒めた意識を持っていることである。とはいえピカロは勤勉さによって人生を開こうとはせず、他力本願で上昇できる機会をうかがう。『ドン・キホーテ』に登場する軍人志願の若者は、いわばピカロ予備軍である。

「ところが僕ときたら、不運なことに、いつでも職探しに奔走しているような男や一攫千金をねらう山師の主人にぶつかってしまったんです。(…) まったくの話、僕のような幸運を求めて主人を探す小姓ふぜいが、これはというような幸運にめぐりあうなんてことは、まあ奇

(39) 同上、11頁。

(40) 同上、12頁。

跡のようなものですね。」(後篇第24章203-204頁)

「主人を探す」のがピカロの典型的な存在形態のひとつである。ラサリーリヨは主人である盲人について、「この男は神様についてわたくしに生活というものを与えてくれ、盲でありながら、わたくしの目を開いてくれ、人生行路の手引きをしてくれたのです」⁽⁴¹⁾と述べる。P. ヴィラールは、こうしたメンタリティーが当時のスペイン社会全体に蔓延していたことを次のように指摘している。

「主人に仕えること」が「職を持つ」と同等なのである。そして単なる「奉仕」にすぎない職業のいかに多いことか！16世紀スペインの労働人口からどれほど多くが非生産業になだれ込んだか、統計をとってみたいものだ⁽⁴²⁾。

スペイン中を放浪するピカロが集中する街のひとつは、セビージャだった。『ドン・キホーテ』に登場する羊飼いの少年アンドレースも、横暴な主人のもとから逃げだして、「世界中のありったけの仕返しよりも、セビーリャへ行くのに必要なものが欲しいや」(前編第31章338頁)と叫びつつセビージャへ向かう。大西洋交易の玄関口で当時スペイン最大の都市だったセビージャは、「冒険を探すには他のいかなる^{まち}市よりも適した土地で、どの通り、どの街角でもすぐに冒険に出くわすほど」(『ドン・キホーテ』前編第14章121頁)で、「一般に《街の遊び人(gente de barrio)》と呼ばれる、何もしないでぶらぶらしている一群の若者がいる。たいていは市のあちらこちらの教区の金持ちの子弟で、ひどくめかしこんだ、しか

(41) 同上。

(42) Vilar, Pierre. 'El tiempo del 《Quijote》'. en *Crecimiento y desarrollo*, Barcelona, 1983 (5ª. edic.; 1ª. edic. castellana en 1964), p. 343.

もにやけた、役立たずの連中である。」(『やきもちやきのエストレマドゥーラ人』20-21頁、カッコ内引用者)という輩もいる猥雑な場所だった。金持ちかどうかという決定的な違いがあるにせよ、こうした「街の遊び人」はピカロとすぐ隣り合わせのところにいたに違いない。さらには『麗しき皿洗い娘』のカリアーソのように、羊毛産業の中心地だったブルゴス(Burgos)の裕福で身分の高い家の息子なのに、13歳で「やくざな放浪生活にあこがれて、(…)ただただ自分の気まぐれで(…)家からずらかってしまった」(234頁、傍点牛島)ピカロもいる。地理的境界を越えて移動するピカロは、時には社会階級も乗り越える存在だったのだ。

(…)カリアーソは、身ぎれいで育ちのよい、そして高潔で人並み以上に思慮分別に富んだピカロ、すなわち放浪のならず者だったのである。かくしてピカロの各段階を経た後、ピカロ道の究極の到達点ともいべきサーラ(スペイン、カディス県の港町)のマグロ漁場ですべての課程を修了した彼は、ついにピカロの師匠の域に達した。(『麗しき皿洗い娘』235-236頁、カッコ内牛島)

さて、主人の見つからないピカロは、よく台所に出没する。先に引用した『ドン・キホーテ』の「調理場で働く^{ピカロ}あらくれたち」もピカロの典型の一つだったようで、セルバンテス作品では他に『リンコネーテとコルタディージョ』(*Rinconete y Cortadillo*)の主人公である少年ピカロ2人も他人の家の台所の下働きをして飢えをしのぐ。さらに、1737年に出された王立言語アカデミアの『イスパニア語典拠辞典』(*Diccionario de Autoridades*)の説明では、ピカロとは「給金は一切払ってもらえない代わりに、余り物を貰うために家事手伝いをしに台所に入りこむ少年たちをこう呼ぶ」⁽⁴³⁾となっているほどである。また、セルバンテスは次のようにピ

(43) Real Academia Española, *Diccionario de Autoridades*, Madrid, 1990, Edic. facsímil de la 1ª. edic. de 1737, pp. 257-258.

カロの生態を描写する。

ああ、それにしてもおまえたち、大家の台所にたむろする、うす汚なくて、ぎらぎらと脂肪ぶとりしたならず者、えせ乞食、偽いざり(ママ)、ソコベドールやマドリーの広場の掬摸、目が見えるくせに見えないふりをしている祈禱師、セビーリヤの荷運び人夫、やくざな女衞、そして、その他《ピカロ》の名のもとに包括される有象無象の連中よ(…)。(『麗しき皿洗い娘』236頁)

他人の台所で最低限の労働をし、何とか自力でその日の飢えをしのぐピカロよりも、「えせ乞食、偽いざり」の方を、当局はより問題視したようである。こうした単なるものぐさピカロと本物の乞食を区別するために、フェリーペ2世は『新法律集成』(*Nueva Recopilación de Leyes*, 1777年)で規定まで行なった。本当に貧しく施しを必要とする者を見分けるために、教区司祭がその旨の証明書を発行し、その証明書には出身地あるいは居住地の司法当局による認証と物乞いの許可が記される、というものだった⁽⁴⁴⁾。

このようにピカロは、表向きの領土拡張や繁栄の影で徐々に内部崩壊を起こしていたスペイン社会の最下層にうごめく、16世紀スペインの負の部分象徴するような存在だった。しかし、盲目の主人との出会いの瞬間にラーサロが、「これまで子供のように眠りこんでいた無邪気さから、わたくしがはじめて目を覚ましたのは、正にあの瞬間だったように、わたくしには思われました」⁽⁴⁵⁾と覚醒したように、文字どおり身一つで社会の荒波に放り出された人びとの、感傷など抱く余裕もなかった乾いて醒め切った諦念が、その背後に存在したのである。

(44) *Nueva Recopilación de Leyes*, Libro primero, Título 12º, ley VI, Madrid, 1777. citado por Fernández Álvarez, *op. cit.*, p. 179.

(45) 会田由訳, 前掲書, 11頁。

2) 女性

女性もこの時代にあつては、制約が多い閉鎖された世界の住人だった。女性は、まず生物学的に未完成で、知性においても生まれつき男性より劣った存在と見なされていた。

「(…) 女というのは未完成な生き物なんだよ。だから女がつまりいたり転んだりしそうなところに障害物を置くなどはもつてのほかで、むしろ、その進む道から邪魔になるものを取り除いてやり、彼女が自分に欠けているところを補って、徳の高い人間となるべく、心おきなく邁進まいしんできるようにしてやる必要があるんだ。(…) 女というものは自力でそういった障害をふみにじり、乗り越えていけるほど、生来の力と徳性に恵まれてはいないからね。したがって、女の前から障害を取り除いてやるだけでなく、彼女の前に、よい評判をかきたてずにはおかない美しさと純真な婦徳を置いてやる必要があるんだよ。(…)」(『愚かな物好きの話』〈*Curioso impertinente*〉、『ドン・キホーテ』に挿入された短編、前編第 33 章 356-357 頁)

女性は男性によって、その生物学的未完成さを理由に保護されるだけでなく、徳性や知性の欠如を理由に馴致され教え導かれる対象だった。こうした見解の源は、キリスト教世界にあつてはもちろん、蛇にだまされて善悪の知識の実を食べ、アダムをもそそのかして墮落させたエバにある。しかし、女性を劣等視する風潮は、時代がくだって近代に入ると中世よりもむしろ強まった。その趨勢がスペインで大きく進んだのは、15 世紀から 16 世紀にかけてである。カトリック両王期にシスネーロス枢機卿 (Francisco Jiménez de Cisneros, 1436-1517 年) が、女子修道会の自立性を著しく制限し、これをカトリック女王イサベル 1 世 (Isabel I la Católica, 在位 1474-1504 年) が支持したことによって、「信仰心篤くして姿は洗練され、男性には従順であること」が、いわば公的に正しい女性の

姿だとされるようになった⁽⁴⁶⁾。さらにトリエント公会議（1545-63年）に象徴される対抗宗教改革の時代には、J. L. ビーベス（Juan Luis Vives, 1492-1540年）の『キリスト教徒女性の教育』（*De institutione feminae christianae*, 1524年）やルイス・デ・レオン（Fray Luis de León, 1527-91年）の『完全なる妻』（*La perfecta casada*, 1583年）によって、より一層の理論的裏づけを得た。『ドン・キホーテ』に登場する、ある裕福な郷士の娘などは蟄居生活を強いられている。

「(…) 蟄居ばかりで、教会に行くことさえ許されない生活ゆえに、(…) ああ、世界を見てみたい、せめて自分の生まれた町くらいは見てみたいという気持ちがついついてきたのですが、この願望が、名家の娘にふさわしい貞淑な行動にそれほど反するものとは (…)」(後篇第49章 406頁)

そして、当時の男性からすれば、女性というのは家事の手がすいた時には、低俗なおしゃべりにいそむばかりなのであった。

(…) ほかにもっとやることはないのか？ (…) のべつまくなしにお喋りに興じているだけか？そして何の話をするのか？ (…) 黙っている時というのはあるのか？ひょっとしたらものを考えることもあるのだろうか、考えるといっても一体何を？女の思考などというものは一般に、思いつくのは早い気が変るのも早い (…) あれほどまでの軽薄さは一体どこから来るのか？ (J. L. ビーベス『キリスト教徒女性

(46) この点に関しては、Segura Graiño, Cristina, 'Las mujeres en la España medieval', en *La historia de las mujeres en España*, editada por Elisa Garrido, Madrid, 1997, pp. 219-220; Ortega López, Margarita, 'Las mujeres en la España moderna', en *La historia de las mujeres en España*, pp. 249-252; Fernández Álvarez, *op. cit.*, pp 173-174.

の教育』⁽⁴⁷⁾

セルバンテスもこうした公式見解は熟知していたらしい。

(…) 女というのはもともと、じっくりと腰をすえて思考をめぐらすことは不得手だが、善きにつけ悪しきにつけ、とっさの気転ということにかけては男よりすぐれている (…)。 (『愚かな物好きの話』『ドン・キホーテ』前編第34章377頁)

セルバンテス作品中には、売春婦、女優、商人などの職業婦人も登場するが、その中でセルバンテスがもっとも具体的性格づけを行っているのが、家政婦、侍女、女中頭といった、裏で家庭内の采配をふるっている女性たちである。こうした女性は、J. L. ビーベスが指摘したようにお喋りなのだが、その内容は恋愛の仲介といった物語展開に重要な関わりを持つもので、気転を発揮しては他人の運命に介入する。表面的な慎重さとは裏腹のこうした老獪ぶりを集約したのが、『ガラスの学士』に見られる次の科白だ。

「(…) 彼女たちのかぶっている、まるで経帷子きょうかたびらのような頭巾すきん、気どった喋り方、なくもがなの老婆心、さらに、考えられないような吝嗇、(…)。(…) 胃がひどく弱い (…)、何かとさえすぐ失神する (…)、まわりくどい話しぶり、(…) 無用の長物にして、愚にもつかない存在であるあの女連 (…)」 (220-221 頁)

以上のように公式見解をふまえた女性像も描く一方、セルバンテスは女

(47) Vives, Juan Luis, *Obras completas*, trad. y edic. de L. River, tomo I, P. 993, citado por Fernández Álvarez, *op. cit.*, tomo I, p. 173.

性を寛容と慈愛に満ちた視点から描いている例も多く、当時の通念からすると相当のフェミニストだと言えよう。男性に強いられた不運を嘆き苦しみながらも、毅然と現実に対処し、同時に名誉も守ろうとする聡明な女性（『麗しき皿洗い娘』の貴婦人）、辛い運命をものともせず快活に生を謳歌する女性（『ジプシー娘』〈*Novela de La gitanilla*〉の主人公）を作品に登場させる。また、男性からもたらされた不幸に苦しむ女性が運命の力によって救われ、大団円で締めくくられる話（『血の呼び声』〈*Novela de la fuerza de la sangre*〉）などからは、セルバンテスの正義感の強さがうかがえる。

そして、世間の通念を越える女性も登場する。まずは、『ドン・キホーテ』中に挿入された、セルバンテス得意の牧人小説風エピソードの主人公マルセーラである。マルセーラは一切の社会的紐帯を断ち切って、完全な自由人として山野で暮らしており、自分を批判する人間に対して次のように宣言する。

「わたしは自由な人間として生まれてきました。そして自由に生きるために^{ひとけ}人気のない山野を選んだのです。（…）わたしは自由な性格に生まれついていますから、人に従属することを望みません。わたしは誰をも愛しませんが、そのかわり人を憎むこともありません。」（前編第14章118,120頁）

とはいえ、これほど完全に因習からの解放を遂げた女性は実在はしなかったであろう。現実からは遊離した牧人小説風エピソード中の人物であってこそ、セルバンテスはここまでの自由を女性に許せたと言える。

リアルそのもの、かつ、生活そのものは因習的なものに甘んじながらも、思考において過激なのが、サンチョ・パンサの妻テレーサである。およそ現実味を欠いたドン・キホーテの計画に家族や仕事も顧みず二つ返事

で追従した、「善良」だが「ちょっとばかり脳味噌の足りない」（前編第7章 64 頁）夫に、テレサは次のように言う。

「(…) あたしゃね、お前さん、昔から平等というのが大好きで、理由もなくお高くとまってるってのが鼻持ちならないんだよ。」（後篇第5章 43-44 頁）

「もう一度言っとくがね、お前さんは何なりと好きなことをしとくれ。しょせん女ってものは、その亭主に、それがどんなに間抜けであろうとも、亭主の命令に従うという重荷を背負って生まれてきたんだから。」（後篇第5章 46 頁）

これは、ビーベスやルイス・デ・レオンと同時代に生きた聖テレサ・デ・ヘスース（イエズスの聖テレジア、Santa Teresa de Jesús, 1515-82年）が『完徳への道』（*Camino de perfección*, 1588年）の手稿に書きつけた嘆きと通底する。しかしこの嘆きは、異端審問による検閲で墨を塗られ、同時代の人びとに届くことはなかった。

(…) わたくしたちは、価値のあることを何ら公の場でいたしませんし、わたくしたちがこっそり泣いているという真実を口にする勇気もございません⁽⁴⁸⁾。

セルバンテスの女性に対する寛容と理解は、おそらく、生来の中庸や強い正義感に加え、私生活によって培われたものだろう。アルジェから帰国後は不本意な職を転々とし、年齢50を過ぎてバジャドリッドに転居した際

(48) Teresa de Jesús, *Camino de perfección*. Ms. de El Escorial, IV, 1, citado por Fernández Álvarez, *op. cit.*, tomo I, p. 174.

の家族構成は、妻のほか姉と妹、そして姉の生んだ私生児の娘とセルバンテス自身が過去の不倫でもうけた娘という、女性ばかりのいびつな、しかもキリスト教的倫理観を大幅に逸脱したものだった。自らの過去の不義の恋愛や姉の存在は、セルバンテスに大いなる忍耐と寛容を強いただろうが、まさにそうした経験によって、セルバンテスは魅力的な女性たちを造形することができた。『ドン・キホーテ』できわだって印象的な登場人物の一人に、旅籠の女中マリトルネスがいる。マリトルネスはアストゥリアス（Asturias）から出てきた山出し娘のうえ、容姿に美点は皆無、おまけに旅籠の客を相手に売春まがいの行為を行いながら、それを「別に恥とも何とも思っていなかったが、それは彼女自身の語るところによれば、不運と不幸な出来事ゆえにそうした境遇に落ちてしまったからだ」（前編第16章135頁）と、まるで屈託がない。セルバンテスはこのマリトルネスを特に「愛すべき女中」（前編第16章132頁）と呼び、情け深く親切で「現在のような生業に身を落してはいるものの、心の内には本来のキリスト教徒らしいところをとどめている」（前編第16章150頁）女性として描いている。しがたい現実に屈することなく、因習をものともせず生きのびていく、当時のスペイン社会における下層階級の女性の魅力と活力を、セルバンテスはマリトルネスの中に結晶させたと言える。

3) 宗教の境界を越える人びと—捕虜と背教者、コンベルソとモリスコ、奴隷—

『ドン・キホーテ』後篇は、「一六一四年七月二十日」（後篇第36章305頁）という具体的な日付が登場するように同時性が明確で、以下のようなリアルタイムのニュースも出てくる。

(…) トルコが強大な艦隊を編成して来襲せんとしているのは確実視されている (…。)。そして、ほとんど毎年のようにくり返されるこの襲撃のため、全キリスト教世界は不安におののいているので、われら

の国王陛下は、ナポリとシチリアとマルタ島の沿岸警備を強化するようにお命じになった（・・・）。（後篇第1章10頁）

地中海は古代よりさまざまな宗教・民族・文化が混交と衝突を繰り返す場だが、近代において状況は複雑さを増した。地中海は相変わらず人と物が行き来する場であったが、対立と衝突が平和的交流を凌駕する緊迫した場となった。近代において新たに登場した国民国家という枠組みよりも明確な境界線、それはキリスト教、イスラム教、ユダヤ教という宗教の違いだった。そして人びとは自分が何者であるかについて、より明確に意識せざるを得なくなった。このセクションでは、宗教の境界を越えた人びとについて見ていきたい。

捕虜と背教者 地中海およびその沿岸には日常的にイスラム圏からの海賊が出没し、キリスト教徒を捕虜にしていたらしい様子が、下の引用からうかがえる。

（マラガの港町サーラでは）人びとは夜になると海辺にあるいくつかの塔に引きこもり、歩哨や見張りを立てて、彼らの見開いた目を頼りに自分たちの目を閉じる。それでもどうかすると、歩哨や見張りも、ピカロ連も、取締りの役人も、とにかくそこに集まっていたすべての人たちが、船や網もろとも、夜はスペインにいたのに、テトゥアン（モロッコの街）で朝を迎えるというようなことが起こったのである。（『麗しき皿洗い娘』237頁、カッコ内引用者）

このように寝込みを襲われて、あるいはセルバンテスのように航海中に襲撃されて捕虜となったキリスト教徒は数多く、彼らの救済には身代金が必要だった。しかし家族にこれを支払う能力がない場合、メルセス会と聖三位一体会が家族に代わり身代金集めとイスラム側との交渉にあたった。

また、王室からは家族に対し身代金集めの許可証が発行される場合もあった⁽⁴⁹⁾。セルバンテスの場合、聖三位一体会の奔走により500 エスクード (escudo, 当時の金貨で、500 エスクードは現在の約1万8000ユーロ=約212万円)⁽⁵⁰⁾で、4回の脱走を試みた5年間の捕虜生活から解放された。オリバーレス伯公時代のある記録によると、こうした身代金は年間約6万8000 エスクード (約246万ユーロ=約2億8850万円) にのぼったという⁽⁵¹⁾。

捕虜はセルバンテスがよく取り上げたテーマの1つで、『模範小説集』所収の『寛大な恋人』や、戯曲『アルジェの牢獄』などのほか、『ドン・キホーテ』では、レパントの海戦のあとアルジェに捕われていたという、セルバンテスの経験そのままのような捕虜の物語に3章を費やしている。そしてこのエピソードに、セルバンテスはこっそり自分を登場させている。

「(…) サアベドラとかいう名のスペインの兵士だけは彼 (アルジェ王) の虐待をまぬがれておりました。」(前編第40章433頁、カッコ内引用者)

こうした捕虜の中で特に興味深いのが、イスラム教に改宗した背教者の存在が稀ではなかったことである。ドン・キホーテ主従の旅の最終目的地

(49) Fernández Álvarez, *op. cit.*, pp. 207, 210.

(50) 当時と現在の通貨の比率については専門家の間でも異論が多く、ここでは議論しないが、本稿では次の2者に基づいて算出した。Hernández, Bernardo, 'Monedas y medidas', en *Don Quijote*, Edic. del Ito. de Cervantes, Volumen complementario, pp. 905-908; Fernández Álvarez, *op. cit.*, pp. 112-116. なお、当時の経済水準を知る手がかりとなる物価と庶民の現金収入については、拙稿「スペイン黄金時代の旅—セルバンテスの小説から」宮崎揚弘編『続・ヨーロッパ世界と旅』法政大学出版局、2001年、213-216頁、を参照されたい。

(51) Fernández Álvarez, *op. cit.*, p. 210.

バルセローナに、ある日アルジェの海賊船が姿を現わす。モンジュイック城砦の西側に漂着したこの權の船に、バルセローナ副王は次のような問いを發する。

「船長よ、君はトルコ人か、モーロ人か、それとも背教者なのか？」
(後篇第 63 章 534 頁)

スペインのみならずイタリアやバルカン諸国出身のキリスト教徒から成る捕虜社会は一種のコスモポリタン社会の様相を呈していたが、この中からアルジェやチュニスの王といったオスマン・トルコ社会の上層に登りつめた者がいた。彼らは出世のために名目的にイスラム教に改宗した者たちで、彼らの逸話は帰国した捕虜などを通じてキリスト教世界にもたらされた⁽⁵²⁾。アルジェでセルバンテスの捕虜仲間だった A. ソーサ (Antonio de Sosa) が残した記録によると、「アルジェにおいて背教者を出していないキリスト教国はない」ほどで、ヨーロッパのみならずブラジルやヌエバ・エスパーニャ (Nueva España, 現在のメキシコ) 出身者までいたという。そしてソーサは、こうした表面的改宗者を「転びクリスチャン」と呼んでいる⁽⁵³⁾。

セルバンテスが作品の中に登場させている成功した「転びクリスチャン」2人は、セルバンテスによる史実誤認はあるものの、いずれも実在の

⁽⁵²⁾ Sola Castaño, Emilio, 'La cruz de la cristiandad. Los renegados y la piratería berberisca', en Miguel Ángel de Bunes et alii, *Renegados, viajeros y transfugas. Comportamientos heterodoxos y de frontera en el siglo XVI*, Madrid, 2000, p. 35.

⁽⁵³⁾ Sosa, Antonio de, *Diálogo de los mártires de Argel*, citado por Sola Castaño, *op. cit.*, pp. 34-35. なお、「転びクリスチャン」は 'los turcos de profesión' 「(イスラム教徒としての) 誓願 (だけ) を立てたトルコ人」の意識、この場合の「トルコ人」は「イスラム教徒」を指す。(この語の解釈に関しては、上智大学の小林一宏教授にご教示を頂戴した。)

人物である。「船を漕いでいるときトルコ人にびんたを張られたのを根に持って、その仕返しをがしたいばかりにそれまでの信仰を棄てた」とされるカラブリア出身のアルジェ王ウチャリ (Uluj Alí) (前編第 40 章 431-432 頁) と、その部下でやはりアルジェ王となったヴェネツィア出身のハッサン・バハ (Hasán Bajá) (同 432-433 頁) である。そしてセルバンテスは特にウチャリを、「キリスト教徒らしい男」⁽⁵⁴⁾、豪胆で卑屈なところがないと称賛している。実際ウチャリは、未亡人の母親と共に漁で生計を立てていた貧しい少年で、18 歳で捕虜になった後ガレー船の漕ぎ手からオスマン帝国第 3 の地位に就いた。そして、フェリーペ 2 世が、伯爵か公爵の地位を交換条件に手元に置こうと企てて密使を送ったほどの人物だった⁽⁵⁵⁾。

イスラム世界がこうした「転びクリスチャン」の存在を許したのは、異教徒の土地で生活せざるを得ないイスラム教徒に対し名目的な背教を許可したイスラム法の考えがあったからである⁽⁵⁶⁾。さらに、セルバンテスによれば、こうした背教者は、背教していない捕虜仲間のキリスト教徒に、「改宗者 某は善良な人間にして、キリスト教徒に対してはつねに好意的であり、機会があればいつでも逃亡せんとしていた」という内容の証明書を書かせることもあったらしい。そして、略奪目的で襲ったキリスト教徒の土地で逆に捕まった際や、自国に完全に帰国して生活する際に効果を発揮したという (『ドン・キホーテ』前編第 40 章 436 頁)。こうした証明書にせよ、「転びクリスチャン」にせよ、宗教の境界線上に生きる人びとが、いかにしたたかであったかを示していて興味深い。

(54) 牛島訳では「もともと気立てのいい男」(前編第 40 章 432 頁) となっているが、原文 'moralmente fue hombre de bien' の 'moralmente' は宗教上のことを示唆すると思われ、上のように改訳した。

(55) Sola Castaño. *op. cit.*, pp. 34-35.

(56) *Ibid.*, p. 31.

(57) このテーマに関する文献は枚挙のいとまがないが、本稿では主に Gutiérrez

コンベルソとモリスコ⁽⁵⁷⁾ スペインという地理的境界の内部で当局が神経をとがらせたのは、ユダヤ教からキリスト教へ改宗したコンベルソ (converso または judioconverso) とイスラム教からの改宗者モリスコ (morisco) に対してだった。この3宗教の相互交流が存在した一種の平和的共存の時代もあったが、13世紀半ばに大進展したレコンキスタが1492年に遂に終結すると、状況はもはやかつてのようなものではなかった。カスティージャでは1480年に異端審問が制度化され、1492年にはユダヤ教徒、1502年にはイスラム教徒に対し追放令が出されたが、こうした一連の政策により、スペインは公式にはカトリック教徒のみが存在する国となった。とはいえ、コンベルソやモリスコ(特に後者)がそれぞれの習慣や文化を保持していた様子が、『ドン・キホーテ』からもうかがえる。セルバンテスがトレードのアルカナ商店街をぶらついていた時に、シデ・ハメーテ・ベネンヘリの手によるアラビア語の『ドン・キホーテ』原典を発見し、干しブドウ2アローバと小麦2ファネーガの報酬で、あるモーロ人にスペイン語へ訳させたなどというくだり(前編第9章80-81頁)は、有名な「トレード翻訳学派」が活躍していた中世のトレードの姿を彷彿とさせる。

コンベルソ キリスト教への改宗者のうちより厳しい目を向けられたのはコンベルソであった。彼らに対する別の呼称として「新キリスト教徒 (cristiano nuevo)」, これに対し、「古くからのキリスト教徒 (cristiano viejo)」という呼称も生まれた。そして両者のいずれかという選別基準

Nieto, Juan Ignacio, 'Inquisición y culturas marginadas: conversos, moriscos y gitanos', en *El siglo del Quijote (1580-1680)*, vol. I del tomo XXVI de la *Historia de España*, fundada por R. Menéndez Pidal, Madrid, 1986, pp. 647-769. および C. ロス著, 長谷川真, 安積鋭二訳『ユダヤ人の歴史』みすず書房, 1988年(第21刷, 初版1966年)に頼った。

は、貴族か平民かという従来からの階級を示す概念と並んで社会全体に支配的になった。この状況はセルバンテス作品でも随所に読み取ることができる。

(…) サンチョ・パンサを生まれのよい男であり、少なくとも古くからのキリスト教徒であるに違いないと見なして (…)。 (『ドン・キホーテ』前編第20章181頁)

「おまけに、おいらは昔ながらのキリスト教徒。これだけでも、伯爵になるのに十分な資格ですよ。」 (『ドン・キホーテ』前編第21章197頁)

「要するに、うちの両親は百姓、つまりただの平民ですが、人聞きの悪い異教徒の血など一滴もまじっていない、世間でよく言う、酸っぱくなったほど古いキリスト教徒で、(…)。」 (『ドン・キホーテ』前編第28章289-290頁)

ある時、(…) 古くからの由緒正しいキリスト教徒の子孫であることを誇りにしている農民のひとりが教会に入らんとし、すぐ後からは、その素性にまつわる評判が先の男ほどよろしくない男がやってきた。それを見た学士は、先を行く百姓に向かって大声をはりあげ、こう言った—

「おおい日曜日よ、土曜日のやつが過ぎるまで待つんだ。」 (翻訳者注：その祝日からして、日曜日はキリスト教徒、土曜日はユダヤ教徒を意味している) (『ガラスの学士』195頁)

セルバンテスは『犬の対話』の主人公である犬にまで次のような科白を吐かせている。

「わたくしは正しい血統の犬であることを示すあらゆる徴を持っておりました。」⁽⁵⁸⁾

14世紀末以降のユダヤ教徒迫害の激化、レコンキスタ終結と同年に発布されたユダヤ教徒追放令は多くのコンベルソを生んだ。しかし彼らは常に、表向きだけの改宗ではないかという嫌疑の眼にさらされた。その理由を推察させる史料のひとつが、13世紀のカスティージャ王アルフォンソ10世（Alfonso X, 在位1252-84年）が編纂させた『七部法典』第7部第24条「ユダヤ教徒について」および25条「イスラム教徒について」である⁽⁵⁹⁾。共に異教徒に関する法的規定を行なったものだが、2つを比較すると、イスラム教徒に対する条項には一種の寛容さえ読み取れるのに対し、ユダヤ教徒に関する規定項目はより具体的かつ厳格である。これは反ユダヤ色の強かった第3回（1179年）および第4回（1215年）ラテラノ公会議の明らかな影響であるが、もっとも注意を引くのが、全11項のうち最終項「ユダヤ教徒は目印をつけて外出すべきこと」である。同様の規定はイスラム教徒に関してはなされていない。そしてユダヤ教徒が目印をつけなければならない理由として、「ユダヤ教徒とキリスト教徒が同じ土地に居住し同様の外見をしていることから、両者の間には、多くの間違いや誤謬が起きている」と述べられている。ユダヤ教徒はキリスト教徒にとってはキリストを虐殺した「不倶戴天の敵」（『ドン・キホーテ』後篇第8章62頁）である上、風俗や習慣の違いが大きいイスラム教徒と異なり、一見するだけでは区別がつかないことから、いっそうキリスト教徒側は警戒心を強めたのである。

服装や習慣の違いが一目でわかるモリスコは異教徒と見なされたのに対

⁽⁵⁸⁾ Cervantes, *Coloquio de los perros*, Edic. citada, p. 249.

⁽⁵⁹⁾ Alfonso X el Sabio, *Las Siete Partidas*, Edic. citada, pp. 669-675.

し、コンベルソは異端者と見なされ、異端審問所による追求の対象だった。フェリーペ2世の時代に入ると、異端審問所によるコンベルソ摘発の数は減り、この問題は沈静化する。しかし、セルバンテス作品に見られるように、一般の人びとの意識からは簡単に払拭される問題ではなかった。さらにこうした風潮は、「血の純潔性 (limpieza de sangre)」という人種上の区別も含意する選別基準も生み、この「血の純潔性」が、大学入学や公職につく際の選定基準としても機能するほどの影響力をふるっていたのである。そして異端審問が最終的に廃止されたのは、実に1834年のことであった。

モリスコ 一方、異教徒と見なされたモリスコに対しては、特に16世紀前半は当局も比較的寛容だった。1502年にカスティージャでイスラム教徒に対しキリスト教への改宗令が出されたが、特に多くのモリスコ人口を抱えるアラゴンやバレンシアなどでは、封建貴族の保護もあって、モリスコはイスラム信仰を保つことを許されていた。16世紀を通じ、異端審問から追及を受けたモリスコは、その全人口の2%ほどにすぎなかった⁽⁶⁰⁾。とはいえ、1500年と1568年にはグラナダ (Granada) で大規模なモリスコの反乱が起こり、特に後者は3年間に及ぶ戦争だった。これに対し、カルロス1世 (Carlos I, 在位1516-1556年) 時代の1520年代には、バレンシアにおけるヘルマニアの乱の影響もあって、アラゴン、バレンシアなどでも強制的にモリスコの集団改宗が行われ、モリスコのイスラム的習慣や風俗に対する肅清策が度々出された。そして16世紀末からはモリスコ追放令という究極策が国政議論の俎上に載り始め、1609-14年

⁽⁶⁰⁾ 1609-14年に追放されたモリスコの総数は研究者によって異なる数字があげられているが、ここではJ.I. グティエーレス・ニエトの支持する32万1000人 (Gutiérrez Nieto, *op. cit.*, p. 735) を採用する。さらにグティエーレス・ニエトによれば、16世紀を通じて異端審問の対象となったモリスコの総数は6600人余り (*Ibid.*, p. 733.)。この2つの数字を基に算出した。

に遂に実行された。

バレンシア貴族を中心とする強硬な反対勢力にもかかわらず、モリスコ追放が実行された理由については、フェリーペ3世の寵臣レルマ公 (duque de Lerma, Francisco Gómez de Sandoval y Rojas, 1553-1625年) の独断だという解釈が伝統的なものだったが、20世紀後半から見直しがなされた⁽⁶¹⁾。まず、国内から異教徒を追放するという国王フェリーペ3世自身の意志が固かったこと、モリスコがイベリア外のイスラム教徒と図ってスペインを脅かすという懸念が常に存在したことがまずあげられる。さらに、モリスコは、農奴や小作農から手工業、小売業までの産業を担っていたが、いずれも低賃金で雇え、勤勉で貯蓄意欲が高く、下層のキリスト教徒にとっては目障りな存在だったという。そこで、モリスコ追放後の穴をキリスト教徒がうめることにより、封建領主や下層民は利益に浴するという計算もあった。1609年のバレンシアを始めとして1614年まで漸次的に実行されたモリスコ追放では、当時のスペインの全人口の約4.6%を占める実に32万人以上⁽⁶²⁾が、イタリア、フランス、ドイツ、北アフリカなどへ出国した。これによってバレンシアはその全人口の30%、アラゴンは20%、グラナダに至っては実に50%以上を失ったが⁽⁶³⁾、この大追放令は、宗教、政治、社会、経済など複数の要因が絡み合った結果だった。

セルバンテスは1615年に刊行された『ドン・キホーテ』後篇で、このモリスコを登場させて、非常に寛容な態度でモリスコを描いている。8世紀初頭の侵入から実に9世紀の間イベリアに定住し、スペインを祖国とするイスラム教徒の間に起こっていたシンクレティズムの様子や彼らの心情

(61) Gutiérrez Nieto, *op. cit.*, pp. 760-766.

(62) 16世紀末のカスティージャ王国とアラゴン連合王国のキリスト教徒人口が約667万人(前注22を参照されたい)として算出。追放されたモリスコ人口については、前注60を参照されたい。

(63) Gutiérrez Nieto, *op. cit.*, pp. 734-735.

をすくい取った記述である。

「わしらはどこにいても、スペイン恋しさに泣いていたさ。なんといっても、わしらが生まれたのはこの地であり、スペインこそわしらの生まれ故郷なんだから。どこへ行っても、わしらの不幸が慰められるような扱いを受けたことはなかったね。(…) 幸福というのは、それを失ってみてはじめて実感できるものなんだ。すると、ほとんどの者が以前の幸せなころを想いおこして、矢も盾もたまらずスペインに戻りたくなる。(…) わしは今にして世間でよくいう、《祖国に対する愛は甘く強し》って言葉を、経験によって実感しているんだよ。」(後篇第54章446頁)

「わたくしはキリスト教に改宗したモーロ人の両親から生まれしました。(…) この真実をいくら訴えても、哀れなわたくしたちの国外追放を担当しているお役人にはなんの役にも立たなかった(…)。(…) わたくしは、母親の乳を飲むようにしてカトリックの信仰を吸収し、ちゃんとしたしつけを受けて育ちましたので、言葉づかいにおいても礼儀作法においても、モーロ人じみたそぶりなど決して見せたことはないつもりでございます。」(後篇第63章535頁)

とはいえ、モリスコ側も事態の厳しさを認識していた様子がうかがえる。

「実を言えば、わしらの仲間うちにとんでもねえ不埒な企みのあることを知ったんだが、その無謀さときたら、それこそ国王陛下があのような決断をなされたのは、神がかった素晴らしい靈感に導かれてのことだと思われたほどさね。とはいえ、わしらモリスコのみんに罪があるわけじゃねえ。中には、実に信仰心の篤い、正真正銘のキリスト教徒もいたんだから。でも、その数は寥々たるもので、本物じゃね

え連中に太刀打ちすることなどできなかった。(…) 結局のところ、わしらは筋の通ったそれ相応の理由で罰せられ、追放の刑を受けたというわけだ。」(後篇第 54 章 445-446 章)

1609 年 9 月 22 日にバレンシアのモリスコは、3 日のうちに当局に出頭せよという命令を受けた。そして、手に持てる物の携行だけを許されて国外に放り出された。真のカトリック信者である者は残留を許されたが、その数は、バレンシアの全モリスコ人口の約 7% にあたる 1 万人にすぎなかった。ほかに条件付で残留を許されたモリスコも、自ら出国を選んだという⁽⁶⁴⁾。

奴隷 最後に、自らの意志によってではなく強制によってではあるが、地理と文化の境界を越えていた人びととして、奴隷の存在に触れておこう。

(…) この馬丁というのは、年老いた、しかも去勢された黒人であった。(…) さらに四人の白人の女奴隷を買ってその顔に烙印を押したうえ、アフリカから来たばかりの黒人の女奴隷を二人侍^{はべ}らせた。(『やきもちやきのエストレマドゥーラ人』14 頁)

「白人の女奴隷」とはモリスコであろう⁽⁶⁵⁾。奴隷制は古代から存在し、イベリア半島の諸王国では、中世から法律で社会における奴隷の存在形態

⁽⁶⁴⁾ *Ibid.*, pp. 763-764.

⁽⁶⁵⁾ Cervantes, *Novelas ejemplares*, tomo II, p. 181, n. 24.

⁽⁶⁶⁾ この点に関し邦語で読める基本文献を挙げておく。まず、いずれも L. ハンケ著の次の 2 点。佐々木昭夫訳『アリストテレスとアメリカ・インディアン』岩波書店、1974 年、および染田秀藤訳『スペインの新大陸征服』平凡社、1979 年。なお、これらと併せて次の文献は必読。石原保徳『インディア

が規定されていた。そして、インディアス征服・植民の拡大に伴い繰り広げられたインディオの人権をめぐる論争において、奴隷の法的解釈はその中心となった⁽⁶⁶⁾。その後、フェリーペ2世の経済顧問だったT. メルカード (Tomás de Mercado) 神父が規定したところでは、奴隷となる条件は、「親が経済的困窮から子を売った場合、凶悪犯罪を犯した者に司法が下す罰、正統な戦争において捕虜となった者」だった⁽⁶⁷⁾。

しかし、こうした法的規定の埒外に置かれ、人として見なされることなく無条件に奴隷化されたのが、アフリカからの黒人奴隷だった。黒人奴隷貿易は、大航海時代におけるスペイン、ポルトガル躍進を促した重要な動機であり、国庫にとっては重要な財源のひとつだった。そのため奴隷貿易には王室からの許可状制度が導入され、「取引量」は個人差があったが、ある奴隷商人には6年間で2万3000人(輸送途中の「損失分」を計算に入れて年間およそ4000人)の黒人奴隷をインディアスで売る許可が与えられた⁽⁶⁸⁾。黒人奴隷が売られていく先は、労働力が不足しているインディアスの方が当然多いのだが、イベリアにも来ていたことが、セルバンテス作品などからうかがえる⁽⁶⁹⁾。そして、当時は人扱いされていなかった黒人奴隷にも、当然ながら人間としてのさまざまな欲求があった。『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』の主人公ラーサロの母親は、寡婦となってさまざまな場所で通いの女中として働くうち、「馬の世話をしている男たちの一人である、黒ん坊(ママ)と仲よく」なり子供もできてしま

スの発見』田畑書店、1980年、およびB. ラス・カサス、石原保徳訳『インディアス破壊を弾劾する簡略なる陳述』現代企画室、1987年(特に訳者による注、解説、年譜)。

(67) Fernández Álvarez, *op. cit.*, tomo I. p. 142.

(68) *Ibid.*, pp. 142-144. なお、この点に関する邦語の基本文献は、R. メジャフェ、清水透訳『ラテンアメリカと奴隷制』岩波書店、1979年。

(69) この点について、Fernández Álvarez, *op. cit.*, p. 143. を参照されたい。

う⁽⁷⁰⁾。この場面の舞台がサラマンカであることから、黒人奴隷の所有が、大西洋交易の窓口である南部アンダルシアのみならず、内陸部にまで浸透していたことがうかがえる⁽⁷¹⁾。

5. 結び

「狂気の中に素晴らしい正気の交錯する変った狂人」(『ドン・キホーテ』後篇第18章141頁)であるドン・キホーテは、最後の冒険であるバルセロナでの槍試合で完璧な敗北を喫して、ラ・マンチャへの帰途、次のような嘆息をもらす。

「この世で起こることは、(…)決して偶然に起こるのではなく、すべて天の個別的な摂理によるものだということじゃ。(…)わしの運命もわし自身がつくり出したわけだが、どうやら必要なだけの慎重な配慮を欠いていたようだ。つまり、いささか思いあがっていて、それゆえ予期せぬ手痛い打撃をこうむった(…)。」(後篇第66章552頁)

あたかもスペインそのものを指しているような科白である。同時にこれは、青年期と壮年期を祖国に捧げたセルバンテス自身の述懐でもあるだろう。フェリーペ2世の時代にスペイン帝国は絶頂に達したが、実はフェリーペ2世は即位した翌年の1557年に破産宣告を出している。安定した経済・財政基盤を欠いたままヨーロッパ近代諸国家の先頭に立ちひたすら拡張政策に身を賭してきたスペインには、カトリック両王から半世紀たった時点で早くも内部崩壊の兆しが現われていた。これが露になるのがいわゆる「危機の年」である1640年だが、それ以前のスペイン社会が見せていた綻びの数々を、セルバンテスは下級官吏としてスペイン各地を転々と

(70) 会田由訳、前掲書、7-8頁。

(71) 同じ内陸部のアビラ(Ávila)に生まれた聖テレサ・デ・ヘスースの父親も黒人奴隷を所有していた(Fernández Álvarez, *op. cit.*, p. 143.)。

するうちにつぶさに目にし、『ドン・キホーテ』をはじめとする文学作品に結実させた。P. ヴィラルルの言うように、「この永遠の書（『ドン・キホーテ』）は、今もって、まず何よりも 1605 年という年のスペインで生まれた書であり、歴史の中にしかと置かれてこそ、その意味を十全に発揮する」⁽⁷²⁾のである。

本稿は、セルバンテスの小説から、執筆時の社会を彷彿とさせる現象や人物を選び、そこに若干の実証的データを加えて、黄金時代のスペイン社会のいくつかの面を再構築する試みだった。文学作品を史料の一種として扱う際には、むろん検閲などの時代環境を考慮に入れなければならないが、J. M. ホベール・サモーラの言うように、「色、臭い、音を伴った」⁽⁷³⁾生き生きとした時代のイメージを提供する史料は他に多くは見あたらない。そして、下に引用する P. ヴィラルルの言葉のごとく、我われの前に、実際には手に届かない過去の世界を立ち上げてくれるのである。

「（文学作品は）世界を写生することなく、學術書よりも巧みに、その機構をつまびらかにする。（No 《pinta》 el mundo, sino que, mejor que un tratado erudito, desmonta sus mecanismos...）」⁽⁷⁴⁾

⁽⁷²⁾ Vilar, *op. cit.*, p. 332. カッコ内引用者、傍点は原文カッコ付き。

⁽⁷³⁾ Jover Zamora, José María, 'De la literatura como fuente histórica', en *Historiadores españoles de nuestro siglo*, Madrid, 1999 (antes publicado en *Boletín de la Real Academia de la Historia*, CLXXXIX-1, Madrid, 1992, pp. 23-42.), p. 349.

⁽⁷⁴⁾ Vilar, *op. Ibid.*, p. 345. 和訳は、清水憲男『ドン・キホーテの世紀—スペイン黄金時代を読む—』岩波書店、1990年、318頁より引用、カッコ内清水、傍点は原文カッコ付き。